

書物の影

堀本 吟

遙かなるゲルツェン

望郷のうたもたざれど夕暮の麦笛などをいかで忘れん

馬場あき子「飛花抄」

「石原吉郎詩集」(思潮社、現代詩文庫)、それから昭和二十六年に
でている「ロシアにおける革命思想の発達について」(アレクサンド
ル・ゲルツェン 金子幸彦訳 岩波文庫)「金枝篇」(フレイヤー 永橋
卓訳 岩波文庫)——昭和四十七年の夏はこの三冊の小さな書物を抱
えて私はあちこちを動きまわった。もともと「金枝篇」はいつも後
まわしになって結局、石原吉郎とゲルツェンを交互に読み較べるよ
うな日を送った。でも、日常雑事のちよつとの暇を盗んでという読
み方である。旅行には、多くは読みふるした書物を、何冊か携帯す
る。汽車の中で眼を傷めないように一行よんでは暫くその一行につ
いて考えることの可能な書物、それを詰めこまねば私の旅仕度は終

らない。

スーツ・ケースをあけると表題が読めるような位置にそれを置
く。書物はそこに納まると扉を持つ心臓のようであった。書物のが
わからは私の瞳がのぞきこめる。私の肩越しにすずやかな外光が流
れ、遠縁の老航海士が気嫌よく「海豹島」のおもいでをものがる
場面にも書物はであうはずである。

この夏は、とても忙しかったのだ。松山市の実家で毎夏幾日かを
過ごすのだが、老齡の祖母の突然の骨折で家族の歓談などどこかへ
吹っ飛び、私はとうとう夫婦で九州旅行する予定を中止して祖母を
迎えに行きそのまま病院に付き添った。実は祖母も旅行中だった。
若いころ住んだ土地に行き甥や姪にもう一度会いたいと思う気持を
いじらしいとして、危ぶみながら送り出した逗留先での椿事であ
る。何か家族というものは、わかっていて不合理なことをやってし
まう。それからずっとその看病や父母の過労を気づかってしまっ
て、実家を離れている私達きようだいはてんで不舞である。この
文章もアイデアだけ抜き書きしたままでさっぱり深化しない。はや

くこの非日常的な多忙と心身の消耗を切り抜けられないかと祖母の
回復を祈るばかりだが、老人の骨は枯れ木と同じだそうで、大腿部
骨折というのがまたなかなか治らないという。とも角、宇治の配偶
者に暫くやもめ暮しをたのんでかけ、ギブスをはめられた病床の
老婆のあらゆる世話をやりながら、この多忙はこれからずっと続く
だろうと思う。私たち夫婦の四人の親、一人の祖母の身上に老化が
はじまっているからだ。心も身体も経済状況も、いわゆる社会的な
秩序の要請するペースにあわなくなっている。これから先、いつも
何かがおこることを見越しておかなければならない。また、私達
(子供達)の世代は、一応独立して自活できるといってもはつきりい
って感情生活が不安定だし、身上に事故病氣その他何が起こるかわ
からない。実のところ私は日常生活が虚妄の時空であるような気が
して、ゆく先非常に不安である。

強くなりたい。一身上の問題は自分でキチンと始末をつけられ
て、しかも心豊かな女でありたいというのが私の偽らざる自己期待
だ。しかしこの自己期待は過大であるのかも知れない。私は家出を
したいと思っていた時期があった。その気持をふつとした後で結婚
したのだが、ほとんど手輕な形式(別れの儀式に対する無配慮とい
うことだ)でおえてしまって、母は感傷を、装飾のない味気ない諦
念におきかえねばならなかったようである。私は華麗なものを観る
のは好きだが、共同体の儀式の中で女に要求される「華麗」という
機能をとってはいはし得ない。法事でも結婚式でも衆人環視の中で
其処に一族の女として坐っていることに耐えきれない。早々に逃げ
だして読書に耽るような娘であった。結婚も、そういうふうに敢行
してしまつたらしく、母達はキリキリ舞いさせられたという。妹が

「姉ちゃんには本当にエゴイストだわ」と批難したということの後で
きいた。私以上に苛烈で女っぽい妹を私は好きだ。母も好きだ。し
かしともかく自我の発散の仕方が私だけちよつと違っている。それ
は疚しい気をおこさせるが、しかし今、三十歳代に入った私が暗黙
の了解とされている相互扶助的な血縁の連帯を崩すわけにはゆかな
い。どうも家族に対する責任は、社会的な責任意識の下限であるよ
うだが、私の心情にはその辺で社会意識の上昇をやめたい気ものこ
っている。私は、自分の考えるべき問題が、「故郷」と己れとの間
に過不足ない距離を置くことにあるだろうと思って十何年も不器用
な試行錯誤をやっているのだ。これから何十年も続くに違いない。
考えずに済ませたいと思うときもあるが、自分が生まれたという事
実にはじまって自分の仕出かしたいくつもの小さな事件がある。こ
の人のことについて考えねばならないという人間が何人かいる。私
の日常が平和でもなく閑でもない。私の私生活の多忙には三つの軸
がある。一つは結婚生活に忙しく、一つは私たち夫婦のまわりにい
る肉親について感情を傾けることが多く、今一つは文字の世界への
めり込む感情を捨てきれないことだ。私生活の形式は母の世代が羨
むばかりの「核家族」なのだけれど、逆に、私は、今眼前の人では
ない肉親の、心の平和について考えざるを得ない。普通の給料生活
者の長男と長女だけれど、結婚して家を離れた上に別居している
いうことで、非常な責任を抱えこんでしまったようだ。

更に、読むとは、時間を益々個人的な領域に分捕ってしまうので
ある。私はどうも過剰の想念を抱いて結婚生活に入ってしまった
し、私と配偶者の生活の共同的な部分が益々削りとられてしまふよ
うだ。この辺を何とか悠々と切り抜きたいのである。

読書 若しくは知的自由の追究は個人的な性格をもっており、国家ないし家庭の持つ共同性が個に対して与えてくる重圧感の唯中で模索される。これは宿命のような「反共同体」的生業である。さて、私のこういう生きざまは伊藤野枝的願望の到達点にあるわけだ。彼女は、己の知的好奇心の伸びゆくまま家出につぐ家出を敢行しついに国家とむきあうに到るが、最後に生まれ故郷の人々の日常生活を、自己の達したイデオロギーである無政府主義と重ねあわせようとしたところで国家権力に殺される。かつて私は野枝の文章を読み進んで「無政府の事実」という論文まできたとき、彼女の回帰についていさかご都合主義だと思つたが、実は私も同じような問題に逢着するのだ。書物を読んだうちに眼前の文字の奥に故郷がせり上がってくるという精神的事態。この共同体に包囲された魂はついにはどのようにしてそこを突き抜けるのか。

親しい人の孤独をみることを耐えがたい。息子や娘が、別の配偶者を伴って家を出てゆくことで生じる父母の孤独は見るに堪えない。書物の内部に深くもぐろうとすると、幻の母は怨めしげである。無条件の均質の連帯を娘に拒否されている顔。書物の内部には自由があるといいつつ実は、読むことは私生活の縁辺をさまよう旅なのであつて、書物に即した想念は実は執拗に俗事につながっている。時々これが日常生活の構図なのだと思う。個人思想をゆくところまでゆかせればこんなふうに日常の薄明と顔を接してしまうのかとも知れない。そして書物憧憬はパラドキシカルだ、いわゆる読むことは生活ではない。

しかし昨夜読んだ宮沢賢治の「風の又三郎」と「イギリス海岸」

の爽かさを忘れてはいけない。あのとき魂を吹きぬけていった又三郎の頃こそ、書物にふきわたっているオリジナルな風である。

私の日常生活と書物の関係は、非常に緊密であるのかそれとも、いわゆる生活上の危機がおれば直ちに断ちきられてしまう態のものがよくわからない。私から書物をとりあげたならば、即ちそれが生活上の危機である——と、私の私的な関心を私的なかたちのまま公認させればシメタものだ、ここ数年シリシリと書物を日常のものとするべくやってきたのだが、少しでも書く方に進むかどうかこの私性が危うくなっている。プロフェシヨナルに対するコンプレクスである。素人であるということとはなかなか書物の書き手をこわがらせない。尊大にするだけである。一方書きはじめると半端な調べ方では書けないことがわかって書き手に対する畏れが肥大していく。それはとも角として、食べる苦勞を人に任せて読む事に専念してはならず、書物とはレジャーを埋めるお洒落な小道具、という他人がいてもそれは堂々たる一見識であるような——こういう規範が生きている場所が生活空間である。本格的に読もうとすれば、それを職業化しなければ「実生活」としての力を獲得できない。しかしまあそういう読む行為をパターン化するなんてサクサクしているではないか。私の求めているのは「個人的な」たのしみなのである。

読むとは無償の感受行為である。深く読む、固有の教訓をひきだす。お気に入りのフレーズをノートする。ひととき私の書物の著者である素敵な知識人達に限りない羨望を感じてしまうが、結局もとのところへもどる。職業化されない専門化されない読書、即ち読む

とは無償の行為。書物そのものを有害視してはいけないがまた、過大視してもいけない。しかし書物もまた文明の器具であれば、読みようによつては他人に仇なし自分に転機を与え虚栄のために利用されることもあるのだ。そういう面白さなのであるか。しかし許される限り、私は人生の達人という用い方で、読むことの達人になりたいものである。

非常時には、当然のように書物は捨て去らるべきである。しかしそれは私の判断で行うべき性質のものだ。何故なら、書物を読むことは個人的な行為であるからだ。書物をいつするべきかについて私には正しい処置をやる自信がない。これは困ったことだ。書物と鍋が同じ台の上にある光景は決して美しいものではない。むしろ生活思想が正常なかたちをもっていないことを示しているのではないか。しかしタダの生活の中で、なお読みたければこういう雑居風景は仕方ないではないか。これが私の日常生活の実相なのだ。一方をやれば一方が非合法、両方やろうとすれば生活スタイルが中途半端である。つまり端正でなくなる。それから、私は家庭生活をやっている者だ。何ぶんにも職業としての研究生活とは違う。読もうとする決意は個人に属するものであり、私生活の中の書物は、どのように親しげにふるまっても、共同性に四角な波紋を投じる図々しい居候だ。第三者——他人であるということ、非生産的であるという意味で。私は家族的な団欒とはちがった時間の使い方をしているのだ。従来の家族主義とはちがった生活原理を持っているのだ。私以外の家族は既に忍びこんでいるこの背信に気がつかざるを得ないだろう。つまり私は、主婦の読書、生活の中の読書といういい方には大きな矛盾を感じているので、こういう言い方の中で二極に引

き裂かれる関心の在り様について、何らかの自己認識を持たなければ、女が生活の中で書物に触れることには何の実存的な意味も持てなくなってしまう。もともとそのことを考えないのが読み手としての面白さなのかも知れないが。考えて見よう、この観念のコンパクトを、鏡をのぞくように、のぞいたり、母親が子供のおムツを替えてやるようにこまめに展覧したりしていると本当にそれらの日常の代替的な行為のように見えるかも知れない。私は子供を持たないから特に人からそう見られたりして寛容な扱いをうけてみたりするが、その寛容さは、子育てや化粧ほどには女には書物が似合わないという価値観の裏をかえしたていのものである。ところで、本など止めた、「ヴ・ナロード」と、誰かの真似をして立ち上がってみるとおめあてのナロード達も一冊ずつ書物を抱えている。要するに「女性自身」であるか、謡曲の台本「鉄輪」であるか、「石原吉郎詩集」であるか、「資本論」であるかの違い……。せめて良書を読めということになるかも知れないが、それが良書であるかどうかより、読み手の感受の仕方にしか基準はおけない筈だ。

そもそも書物の起源とは、移ろいやすい観念の保存、ことばの恒久的な記録であるから本質は非日常、スタイルは日常的な物質である。それに文明の他の諸器具と同じように売り買いされているのだ。使い捨てられても文句は言えないが、使い捨てないために物質になることを自らのぞんだ観念なのだ。有限と無限を一個の箱の中に詰めこんでいるこんな書物との距離のとり方はもともと難しくあたりまえなのだ。そこで、もう単純な日常現象と思ひなして気軽にホームにでもどこにでも引き入れればいい——ところが読み手に要求されてくるナルシスティクな孤独癖は親しい人々との日常的

な関係に何らかの影響を与えずにはおかぬ。また、書物は、魂を扱うように、丁寧に刺激的に付き合ってやらねばその難解さをふりほどいてくれない。彼らと書物、二様の関係を引き受ければ私は生活感情の激しい分裂を感じる。それでも何十年の生の長さを、人間以外の何かとも関わり合おうとする求道主義によってであろうか、いっそきりさかれるにまかせながら、書物を相対化する作業を、いつの間にか視野に入りこむ書物の両端を両方の手で握りしめる。

定住の場所を離れると心はカラカラと音をたてて乾く。書物も紙魚のにおいから引きはなし、家屋やエッセイストの手前勝手な所有者面から切り離さねばならない。旅へ彼らを携帯することは、私流の「清潔へむかう観念行為」である。新幹線の車内なんか凄いのだ。耳がキーンとするような迅さが体内に一定のリズムを作りだすと、家具のにおいのこる道具は、私とは関係のない未知の旅行者のようにその迅さに乗っている。おかげで私も所有者としての重荷から解放されるというものだ。

例えば、旅行仕度の一つとして書架をのぞくとき、書物への執着が習慣化されているな、と気がつく。良い文章には性的な魅力があるようだという意味のことをいつていたのはたしか内村剛介だった。全くそのとおりだと私は嬉しくなり、それから後めたくなる。書物に執着すると、自分は発祥の土地をうしなうのか、それとも帰るのか——。とも角そんなふうにして、その夏も私は実家に向かった。私の旅というのはたいていこんなふうな帰省の旅である。

結局、年に数回、肉親の許へ元氣な顔を見せ、家族的な変時があ

るときは緊急に駆けつける習慣を私はやめていない。結婚したからといってこの習慣は改まらず、加えて配偶者の方へも同じような帰省が行なわれている。家庭園からの脱出を考えたり、私一個の身上にいろいろ変化はあったが、こういう帰還の形式は変わっていない。ただし郷里にむかう内面には明らかな変化があり、毎度携える書物の役割りなども明快になっているようだ。

どうも私は自分が少女期に過ごした土地柄を余り好きじゃない。風景の印象が稀薄なのだ。瀬戸内特有の温和さと凡庸さである。しかるにその風景が、予讃線の列車が松山市に近い海ぞいを走るにつれて押れ押れしく囁く。「おまえは思春期をこの土地で迎えたのだよ」。そのとき、明らかに私は日常性の原点へ帰りつつある。両親も私も土地の生まれではないが、そういう定住の事情はすでに遠く、父母はもはやこの土地に骨を埋めるという。ただ私は「故郷」というとき、日常の薄明を思い浮かべねばならない自分を時折隣れむ。私の故郷は観念上の風景と、人為的環境に分裂していて、後者の記憶の方が強烈である。ここには望郷を逆おとしにしてキリキリと、自己と地形が痛み合う、そんな趣きがないのである。私が当時から書物の方向にうつむいてばかりいる少女だったから、この小さな異端に対してかの土地の土神は何の愛憐もかけなかったのだ。想念の過剰に対する復讐として、美しき原風景に自足する特権を与えてくれないことこそ苛酷な処置である。暮れ方の油に似た内海を眺めながらおもう。私の眼前にあるのは既成事実のなれなれしさを押しつけてくる土地である。しかし、既成事実とは拒みようのない強さがあるのだ。それに肉親は多情多恨だ。私は遂にその感情の過多に呼応して家に帰る。心の内部の葛藤を何ら詳しく説明すること

なく、ただいま、などといって扉を叩いている。説明も弁解も抗議も不要であるような関係のこもる屋内——。肉親は——つまり私のかけ値ない故郷は——結婚させ、送り出すために子供を育て、娘たちが不在になればつねにその記憶とともに暮らしている。肉親は無償の愛を注いでくれる存在ではない。つねに返礼を期待している。帰還という返礼を。人の子は、誰しも、この一方的にとり決められた関係性をこえられないのではないだろうか。この形式を崩すと、滅びるのは母達だ。こういう関係こそが故郷の本体である。結婚し、または一人の男を私の私生活の同伴者に選んだとき、故郷は分裂する。彼が、不在である私の像と対峙してくれていることがわかれば、私はそこに再び帰らざるを得ない。私の旅はだから二つの故郷を往還するほんの数時間である。書物の中の思想に悩みぬいた日々とのふとした機会にそんなことが理解できた。人はもともと早い時期に理解していることだろう。いや疑うことがないにちがいない。書物はいわゆる絵空事であり、人間はけじめなく連なりなりあうことで、辛うじて自意識の孤独なあてどなきから救われているのかも知れない。書物は孤独であることをゆるし、孤独なまま理想のコミュニケーションに棲むことを許すところがある。

私は観念のうちにかけ値ない人間模様を描いていて、それが私の故郷である。余り広くもないその共同生活圏には二つの感情の極点があつて、一つは性に関わる愛憐、一つは血縁に関わる愛情である。内なる人間はその二つの極点にむかって烈しくひき裂かれる。そのとき私と、私の親しい人達は寄り添っているのに孤独な愛に飢えた表情をしている。

私の持つ、このような執着は故郷に対する郷愁といった性質のもの

のであろう。ところで故郷にまつてくるおもいの今ひとつに望郷といわれる感情がある。すべての人が望郷の念を抱くと考えられているのは間違いないであつて、私などは次のように考える。望郷とは例えば風景画を佳しと観るときとの感興に似ている。熱のある眼を冷やして抜けた場所、どんな自然が私の共同体の暗然たる部分を溶解してくれたかによって望郷の深さが決まってくる。私たちはいつも郷里の山に登り、海にでてこの土地の北限を見極めようとしているのではない。生活をとりまく自然はだから視線の及ぶ限り美しく豊かで広大で、つまり反人爲的でなければならぬ筈である。そういった意味での故郷風景は実に書物から得て絵画から得ている、地平線の彼方の更に遠げきところなのだ。書物の内部はともひろく爽やかなのだ。魂の巨大さに見合う広大さもあり、微視の世界に自足する遊びも覚えられ。私は書物に乗って故郷の北限まで行こうと決心した。それで家を出るという精神の旅をほぼ完了したのではないかと思う。

本気になって帰ろうと思う決意には何か後めたいものがある。肉親でなければ行ない得ない言動というものがあつて、そんな細々した交流が目的である。但しこれが唯なる郷愁の行為であつて、望郷ではないということ。その土地の骨になることを前提としない帰還の危うさのため、本質的には肉親の孤独は解消しない筈である。帰郷の度に、山河草木を埋めこんだ書物を同伴する習慣は決して父母たちのそれではない。書物には故郷に欠落している風景があるからだ。私は父母にとって何であるのか、いつも考える。均質の血をわかちあひながら見知らぬ異端者なのではないか。いや書物なのではないか。関係はイロニカルなものだ。一度親交を結ぶといつかさ

わやかな表情も汗に濡れてくる。他人の声をきくことなく幻想の自画像に己れを呪縛することによって、やがて花に変身した神話世界の美少年に擬して、私も堅い文字などを唇の端にのせ、書物に変身してゆくのではないか。故郷からは私の瞳の中に何を覗くか。とも角私は帰る。私は待たれているから。それに私は故郷が憧憬するものを鋭敏に感じとって、やや過激に継承した人間かも知れないからだ。

石原吉郎の旅について書こう。私は次のような詩を度々読み返す。

白い

清潔な駅におり立つと

生涯は、そこで

終っているようだ

そこからあるきだす

一服の煙草と

よく透る挨拶と――

めくるめく記憶は

不意にとおいにせよ

そこで終るのが

おれであって

いいはずはない

風があると

君はいったな

風があるだけでなく
おれがある
さようならといわずに
ひとつの領域をこえる
まぶしい背中だけの
おれだ

〔石原吉郎「白い駅」より
前出「石原吉郎詩集」より〕

終わったのは目的地へむかう過程の旅だ。本当はそこからはじまる。あるいは書物が終り、世界が始まる。その始点に立つとき過去からも未来からも隔絶されたことの自覚が襲う。そのときリリックでさえある「生涯の終り」の自覚、諦念と決意の非常に微妙なバランスがこの詩に充ちている緊張である。時間も大地も実は続いている。「さようなら」と言わずして超えねばならない一つの領域があるだろう。白い箱型のスーツ・ケースをさげて駅にたつと私はこの詩の一行を歩みだしている。

世俗的な用件を持っけていても、旅には必ず裏の目的がある。歩き出すことの自己目的化。そのひっそりした解放感をめとめよう。出発点はすでに記憶、到着すべき彼岸は見えず大いなる過程は距離のま唯中。旅人はとにかくしらみつぶしにゆくしかない。書物の章を次の章へさまようように。始源と帰結を切りとった旅の数時間は読むことの瞬間と重なる。

石原吉郎は数奇な旅の経験をもった人である。敗戦と同時にソヴィエト・ロシアに捕えられ、シベリアのラーゲリに収容されて強制労働に従事する。そして引き揚げてくる。その地での苛酷な囚人生

活は私の想像を超えるであろうし、それはいわゆる生活とすらいえないものであったろう。しかし旅の日程に上らなかつた突然の定住――強いられた定住こそが、故郷の起源であるかも知れない。その地がシベリアであったのだ。極限の自然の唯中に極限の人工的な共同体牢獄がたっていた。私の現在の眼からみれば彼は日常的な習慣としての帰郷と離郷をより大きなスケールで行なったもののように思える。

誰しも胸中に秘めている北の異郷、その土地の政治によって囚人とさせられた人がついにはその土地の自然と誰よりもラディカルに交感しあう。そこへ行き帰った人々が様に清冽な言葉を獲得しているのは何故か。彼ら石原吉郎や内村剛介はだから二つの故郷を持つてしまったのだ。生まれ故郷日本よりも広大であり寒い場所であったという異郷にあって、日本的な生活のディテールをすべて奪われながら、他人の監視下に生きつづけることの異様さを私は思う。その中で感受すること、思考すること、視ることを棄てなかつた人の生き方は、政治にとらわれた日常生活者がいったい何をすべきであるのかということについて物語っている。あるいは日常の囚人となった観念がどのような旅を辿るかにについてを石原吉郎の詩は独白する。

戦争という俗事の旅の苛酷な悪意か、あるいは想念の旅のどういう誤算か、故郷を分裂させてしまった一人の人間の孤独を私が見るのはまさに詩の一行、書物になった詩集の中である。

やがて私は声もなく／石女たちの庭へむかえられ／おなじく
声もなく／一本の植物と化して／領土の壊滅の上へ／たしか

影をおくであろう／（後略）

〔石原吉郎「サンチヨパンサの帰郷」より〕

男子が継承するこの荒廃は／およそ男子の継承へゆだねられ／
男子が継承してそれは終る／継承するやいまいの目蓋／一個
の木椀にいたるまで／容赦なく継承せねばならぬ／（後略）

〔同「埋葬式」より〕

このように詩わねばならない人の心も生活も決して安定していない。彼はただこの荒廃の土地に棲みとおすことを決意しているのだ。シベリアから釈放された彼は、故郷の親しき人々から踏み絵のようにその土地の習俗を守ることとを要請され、「アカではないこと」を誓えと言われたという。このときこの引揚者の視界には、領土の荒廃に対比されて、かの土地の自然が巨大な地形の規模をもって沈んでいた筈だ。彼は望郷をどの土地に被せるべきであったのだろう。彼は、ソヴィエト・ロシアに介入してくる反革命の国の国籍を持ち、日本に帰ってはすでに血縁、地縁の共同体の異端者である。遠い国で政治的な体験をした人、のみならず若ししたら故郷にとつては見えてはならない風景を見えしまった人であつたかも知れない。確かに石原吉郎の詩の断言の奥にはシベリアの広大さがひそんでいる。彼はその視線をもってしか国土の土に立てない。それでも彼は継承しようとする。何を？ 分裂した故郷を二つとも……。この意志こそ強烈である。私は私の国土に疑いを抱いてしまっている。で、私は思うのだ。どんなに荒廃していてもそこを継承すること。そういう関係が一人一人の人生にはあるのではないだろうか。

先ずその関係を選ぶことだ。

日本の国土に住むものが異郷を欲してもそれは自らの故郷を引き裂く結果をしか生まない。でも人間には馬鹿なところがあって、欠落しているものを何としてでも求めてしまう。ところでロシア人にとってロシアとは何であるのか。ロシアとは森羅万象の集う小宇宙のような意味を持っているのではないだろうか。ゲルツェンの「ロシアにおける革命思想の発達について」は、自国ロシアの可能性に対する全幅の信頼がのべられている。百年前、ロシア帝国の内部に幾世紀を生きつづけてきた伝統的な共同体があり、そこは「ツァーリズム」と悪しき欧化主義の抑圧がなければ限りなく自由な始源の土地である筈だ」というのが彼の提出したロシアである。こういう光景を読むと唖とする。彼の郷土愛は単調へむかう人の安らぎが漂っている。「倅せ」とはこういうものかも知れないのだ。

（前略）雪をかぶったもみの林のあいだから、ひろい原の上にロシアの村々が見えて来る。これらの貧しい農村共同体のすがたはわたしを心から感動させる何ものかをもっている。小さな家々は、散らばっているよりはむしろ燃える方がいいというかのように、たがいに寄りそって立っている。垣も柵もない畠地が家々のかたの限りの遠方にすがたを没している。小屋は——人間のために、家族のためにある。土地は——みんなのために共同体のためにある。（後略）

〔A・ゲルツェン、前出書。旧漢字は筆者が新漢字になおした〕

共同体の内部はしよつ中、小さな事件をおこしているものだ。それに、外へむかつては異質の要素への思いきつた弾圧をばねに一枚岩の結束を目ざすが共同体の共同性というものである。各人の多様な生き方を許し得るだけの近代に特有な個々の権利の許容をこの農村共同体はやりおせていたのだろうか。私はこの点はゲルツェンの一方的な美化であつたろうと思う。ラーゲリはあんなにも長期、日本の民衆を閉じ込めていた。それはスターリンの罪科のみではなくロシアの共同性の利害から発した政治行為である。

ともかく私に印象深かつたことは、ここにロシア革命の故郷の像が提出されているだろうということにある。一人のロシア人に、この広大な自然と垣根のない人々のすみかが感動を与えている限り、このくにの人々はまだしも逃げだせる場所をもっているというべきだ。彼によつて私は、レーニンやトロツキーも有していたであろうロシア革命期のコンミューン感覚を知らされた、いわゆるミール共同体というのであろうか。たとえば林道義のこんなふうな見解を最近私は読んだ。「スターリンは彼らの共同体意識に妥協して、それと適合的な国家の構成を作り出した。一見近代的な男女の完全平等や普通選挙権といった外見にもかかわらず、一九三六年のスターリン憲法は、ロシアをして巨大な一つのミール共同体にしてしまったのである」（林道義「スターリニズムの歴史的起源」五五ページ お茶の水書房）。

この見解に従えばゲルツェンの夢想は今も生きていることになる。但し、林道義は「ロシアの歴史は『個人主義』の受難の歴史である」と更に述べる（前掲書五八ページ）。ナロードニキの思想にあった「個」の尊重が、エス・エルの実践運動の過程で捨てられ、「共

同体」的なものが前面化してきた。スターリンは、ロシアの個的なものを最終的に葬り去った……と。私はロシアの伝統的共同体が有していたという個の概念が今一つ鮮明に理解できないが、石原吉郎、ゲルツェン、林道義、最近知ったシニャフスキーに触れるなかで、むしろ自然の広漠さについて思ったのである。ロシアの共同体は風景の只中に自足する己れの生き様を容認しない政治体制を受けつけず、ゲルツェンが指摘するように、黙って頭をちぢめて頭上をやりすごすのかもしれない。この非政治性は西洋流の個人主義に基づくものではなく、自然に対する信頼なのだ。正しくこは始源の明快さの中に住む故郷に相違ない。革命のために首都に狂奔した青年が必ず帰ってくる場処なのだ。こういう故郷風景がはやばやとなくなることは信じ難い。

だが、この種の共同性に抗しうる個人思想など存在するだろうか。シニャフスキーの前途にはすでに不吉な影と不安がきざしている。とまれ、ゲルツェンは彼の同時代人と同じく、調和に充ちたコンミューンの存在を疑い得ない善良さを有していた幸福な知識人である。自己の魂をかなり巨大な規模に広げたとしても、それを包容するだけの広さがロシアの大地にはあるのだ。粛清、ラーゲリ、核兵器といったスターリニズム・ロシアの国家主義の顔を、マルクス主義的革命の偏向形態であるとも見ることが出来る。同時にその背後に「ロシアの伝統的共同体」の存在が大きな関連を持つて存在しているとする指摘にも尽きせぬ興味をもつ。しかし今私が思うことは、一所に定住する生活こそ強くまた恐ろしいものではなく、それを押しつつ自然が巨大で美しいことを羨しくまた恐ろしい、ということ

とだ。旅にでて、そういうことを観てくるのであれば、旅に出るとは一体何なのか。個の想念の旅は迷路にはいった。天上高くとびあがり、遠くまで視ようとするおもいはついに巨大な四方の風景に封印され、己れの故郷の最もリアルで素朴な部分につながつてゆくのかも知れない。

私の高等学校時代に一人の国語教師がいて、私は教師というところの先生のことを先ず思い出す。授業はとりたててダイナミックではないが精確なところがあつたこと、私はこの先生の読書指導に従って本を読むのが楽しかった。そのせいか先生が教壇から話してくれた事柄の幾つかを今でもあざやかに覚えていて。これはロシアではなく満州の話だ。居眠り防止の苦肉の策とでもいうように、しかし律気な淡々とした語り口を崩すことなく、ただ記憶を伝えるように語ってくれたことがらは、満州へ出征した機に観た景色であつた。その土地の花々の乱れ咲く広さについて、である。その土地の山の中に這い込み、膝まで埋まる落葉のなかを行軍し、やと山をぬけてたところで、思いがけず時枝誠記の「国語学原論」を見つけたのだという。とびつうにそれを買って貪り読みました、というふうなエピソードは、平坦な田園の泥に包囲された城下町で、小さな学校と狭い家庭に保護され伸びきらぬなかを内側に折り込むような感情生活を送っていた私のような少女には忘れ難い印象をのこした。書物とこのような出遇いがあつたのだ。あるいは、日本的文明とのこのように劇的な出遇いが象徴したものは何であらうか。離郷した人間が、たつたひとりで、異郷の広大な風景のまっただ

だかにいて、再び他のどんなシンボルよりも明快な姿をもった「故郷」に再会している。「国語学原論」が、なぜ其処に在り得たかについては、即ち当時の「満州国」の歴史的な性格をさぐらねばならない。日本のナショナリズムが異郷の只中に侵攻して発揮した政治暴力の結果として、この奇怪な虚妄の「国家」は成立した。日本から出征した兵士達は、その植民国家をまわる肉弾であつたろう。しかし郷里にあっては一人の農民であり商人であつた人々にとつて、「満州国」は広大な原野以外の意味を持たなかつた、と私は思う。アジアの内陸で戦争に巻きこまれたすべての日本人にとって、その土地の土着の共同体と風景は文字通り生存上の敵である。しかしまた一所に定住し自足する人の場所へ主人面して侵入する行為は悪事なのだ。政策の一駒として引っぱりだされた一兵卒には侵略者としての責任は何ら課せられないが、この兵士が引き据えられた位置の不安な抽象性、及び一個の肉体に再び災害のようにふりかかってくる自然の暴力的な復讐のおぞましきについて思い到るとき、私は限らない痛ましさを覚えるのだ。「国語学原論」は私の教師である人の魂に、具体的な故郷としてしずんだに違いない。この記憶が先生の戦後の生活態度に無関係であるとは思えない。俗事にことよせて遠くへ連れ去られた人の魂の帰旅はこの瞬間始まつた筈だ。

生意気にも私は師を選ぶ生徒であつたが、といって先生が特にヒキにした生徒などはいなくて私の関心も私淑というていいものであつた。無論卒業すれば教育関係は解消するのであつた。そんな関係が好きなのだが、十年を経た今、私はどうしても先生を訪ねたくなつた。私はこの先生の前では永遠の生徒ではないのか、と思わせられる印象をもう一度確かめたくなつた。懐しさを抑えるすべもな

い、私は祖母の看病の暇をみて、高校の同級生と語らい先生の私宅を訪ねた。実に十年ぶりである。照れくさかつた。「先生、こんにちは」としか言えない。ところで先生は、依然として、淡々とキッチンとした応待のことばの中に過不足なく自己の意志を伝える人であつた。郊外の大きな農家だけれど、とても端正な門構えで、菜園用や農事のための庭と応接間に面した庭園が低い塀で仕きられている。その塀越しに見える常緑樹と奥さんの丹精であるハイビスカスの奔放な紅色がとりわけ対照的に二つの庭の機能の違いを示しているような、そんなお家なのであつた。この土地に十五年程住んでいたが、土地の旧家の内園をみるのはこれが初めてであつて、また、通された座敷の一方の壁面を潰して、巨大な本箱が置かれ、書物がキッチンと並べられているのも面白く、私は時の経つのも忘れていた。

ところで、昔は閑静であつた筈のこの屋敷の頭上は、山向うの飛行場から飛びたつた飛行機のちようど通路になるのだ。私たちが話していると本当に声が掻き消される。その数十秒の間のもてない長さというのは何とも言いようがない。私は先生が可愛想で仕方がない。かつて教室で見たことのない哀しそうな表情で沈黙しておられる。ややあつて騒音が去つたあと、詫びるともなく、憤りともなく、むしろ哀切に大地の手触りを懐しむ口調で、「将来、ぼくは防音装置のある地下室をつくつて其処に住もうと思う」と言われるのだ。私は反射的に「地下室を掘つてまでこの土地に住まわれるのですか」と問い返してしまつた。ああいけない、これではまるで非礼な詰問ではないか。私は土着の切なさに関して全く鈍感なところがある。それに対する先生の返答は「父祖伝来の土地だから」という

言われてみれば当り前のことであつた。私よりもっと強くこの土地と結ばれている人であつた。大地と垂直な関係を持つとうとする人の微妙にロマンチックな感性を目のあたりに見た驚きであつた。この人は私が旅に出たいときに黙々と地底に向かう。その実現するか否かはさておき、公害の地表を逃れて、地下の書齋で、教職を退いた後の日々を過ごそう、というのが先生の偽らざる願ひなのだが今後飛行場が縮小されることはまずないのだ。この生つ粋の郷土人を地下に住まわせるまでに追いつめてゆく郷土の荒廃に私は怒りを覚える。語られる夢の背後には、再び故郷を選びとつた人の深い定住の決意がある筈である。そして私もこの土地に秘めやかな生活を営む肉親のために帰り続けようとしているのに。私の脳裡には再び、先生の観た満州がよみがえる。また「男子が継承するこの荒廃はおよそ男子の継承へゆだねられ」という石原吉郎の断言の詩のリフレインが響くのである。更に、かのゲルツェンが感動したあの雪原上の共同体——自足する永遠の故郷風景が影のように走つた。まことに望郷の原点に住む人は強いのだ。郷愁の原点の生活共同体はおそろしい。なおしかし、私達の願望にも拘らず真正の故郷は遠くなつたと思わざるを得ないのだ。

広所恐怖症の裏返しのような広所憧憬に重ねて、私が郷里や昔の先生のことを考える行為は、生活者として自足している人々への紛れもない侵犯なのではないか。他人の苛酷な体験を素材に己れの一過のロマンチズムを充たすやり口は卑しい。そんなふうに畏れながら、私の故郷へ向かう魂の旅程には何人かの実在人が各々その個性をさらした横顔をみせて立っている。まるで絵画のように。文章を創る過程の必然として引きずりこんでしまうそれらの人々は必ず

自分の風景を持っていて、私はその景観のすみずみまで見ようとしてしまふのだ。そうして次に、私はその人々の生活人としての態度が、なべてラディカルであることに気づくのである。戦争世代の強さは私の世代の強さとは異質であるかもしれない。けれど日常的でない風景を鑑た人の持つ強さというのはユニークだ。北から帰ってきた人々に共通する回想の語り口は、草原、風、酷寒、花の大群である。つまり自然の巨大さへのしみじみした追憶である。その記憶をとおしてのみ彼等は日本の狭隘な国土を眺めた。私はもはやかかる巨大な景観と直接結びあう方法を持てぬのではないだろうか。観光客としてみる風景は真正のそれではないのだから。あるいは観光客としてしか私はその土地の風景に挨拶できないのだろうか。

レールモントフ——ゲルツェンに先行するこの国民詩人の一つの詩を美しい、と私は思ったことがある。

ふしぎな愛だけれど わたしは祖国を愛する／わたしの理性もこの愛をうちまかせない／わたしをたのしい思いにさそうのは／血潮もてあがなれた着れでもなく／傲慢にまかせきつたものの安らぎでもなく／おぼろな昔の聖なる伝えごとでもない／けれど なぜかは知らね わたしの愛するものは／その冷やかな野辺のしずもり／生いしげつた森のゆらめき／海にも似た川のおふれよ／（後略）

〔レールモントフ著、稲田定雄他訳「祖国」筑摩、世界文学大系26巻〕

詩人の抒情の根拠が非常にはつきりしている。ロシア人の芸術感

覺が、地上的で現実的な愛情に裏づけられていることを、ゲルツェンは「ロシアにおける革命思想の発達について」で飽くことなく述べている。ロシア民謡は「すこしもロマンティックなものはないし、ドイツの民謡におけるような病的な希求のひびきも聞えない」。(ゲルツェン前出書)という。そのとおりだ。詩人たちの詩も、ロシア民謡のこういう地上性を継承している。私がゲルツェンに感じる好感もまず、このような種類のものだ。ロシアでは「国民的詩人」という讃辭が奇妙なほど実感的であるのは、彼らがすべて単一の母なる大地を信じているからに外ならないだろう。レールモントフの「祖国」は、「故郷」と題されてもあるいは「風景」とされてもいっこうにおかしくないのだが、「海にも似た川のあふれ」に浴びせられる愛を「祖国」への愛に高め、「理性もこの愛をうちまかしえない」と結論した点に思想的な面白さがあるように思う。私はロシアの抒情詩の系譜をよく知らないのだ。しかし、このような詩の出現を通してロシアの近代的国家意識が醸成されたのだろう。民衆生活に潜在するコミュニンの觀念を日常生活の縁辺から今一步踏み出させ、その視野がゆきつく場処に「祖国」という文字を置いた。だから祖国とはロシアの風景のことなのだ。風景は時代によって、また人々の心情のレベルによって、「故郷」とも「大地」とも「共同体」ともよばれ、単に「ロシア」とも言われる全体性―共同幻想のシンボルだ。疑いもなく、ゲルツェンも、この風景の詩を理想のコミュニズムへと觀念的にひきあげるロシア知識人の感受性を継承しているように思える。ロシアでは芸術感覚のみならず、思想感覚もまた地上的にならざるを得ない。

詩人というのはその人個人の感受性に賭けている人間だ。だから

「国民的」な詩人という尊称には世俗の狎れ合いがひそんでいる。彼らを共同体から乖離させているものは、「海にも似た川のあふれ」に投入するリリシズムなのであるが、実は民衆のリリシズムでもあるその感情に祖国という理念の文字をあえて置いたとき、詩人の望郷は具体的な思想のかたちをとった。明らかにゲルツェンはそのようなロシア観をうけつぎながら更に、ロシアの風景から、ツァーリズムの専制主義とその欧化政策を追放しようとしたのだ。ツァーリズムはロシアではない。森羅万象に護られているナロードの共同体がロシアであると。

ロシア、というとき私を叱咤するものはその完璧な社会性、全き健全さ、そして全き単調さである。それは今もって私の生活圏が私個人に期待するものと同質である。母の世代、父の世代が継承を強いられた十全に果たし得なかったその課題の継承をまた私の世代が強いられる。私も、せめて肉親の生きている間はそれに応えたいと揺れる心情を持つてしまう。ゲルツェンはいふ。「個は共同体に吸収されている」。決して矛盾はないのだ、と。本当であろうか。なんとロシアの共同体とは倅せな住み処なのか。ロシアは、つまりロシア人のロシア観は地平線の円環を冠せられている。それが余りにも巨大であるために誰もがその閉じられた構造に気がつくことなく、むしろ、その病的なほどの健康さを次代を担う上昇的な健康さと思ひ違ひしていることだってあるではないか。

レーニンやトロツキーの後で彼を識つたからであろうか。私は、この十九世紀後半のロシアの知識人の政治感覚の余り鋭敏でない点に安らぎを覚えた。私はロシア・マルクス主義にみながっている政治革命への誘いに惹きよせられ、そして酷く疲れた。革命に関する

すべての書物には政治的主張があつて、ゲルツェンのそれも例外ではないけれど、政治的巧緻に侵犯されていない故郷は人の視線を和ませる。生活を自然状態のまま永遠に自足させること、ナロードニキによって追求され始めた永遠のロシア・コミュニンへの回帰、こう見ると、ロシア革命の軸は単一的ではない。ゲルツェンの觀た雪原上の共同体はほんとうに死んだのであろうか。彼のロシアへの唯ならぬ思い入れを、私は復古的な伝統への回帰であると読みまちがえそうになるが、実は、彼は西欧の教養をもつ近代人である。個人が共同体と矛盾対立しないで生存する調和状態を求めるというのも、個人主義のもつ自由の理想の重さを知っているからであろう。但し、ゲルツェンの良質の共同体は個人を包みこんでしまつて個に安らぎを与える。だが私には、多分に疚しい反・コミュニズムがあつて、このように考えてしまうのである。如何なる共同体であろうともその最良のモデル・タイプに個人をはめこむ倫理的な正当性を持ちはしないだろう。たとい、ソヴィエト・ロシアが、ロシア全人民の期待を担って建設されていたとしても、何の害意のない日本人の兵士を「革命の利害の見地から」ラーゲリの囚人にしてしまふようなことは許されないので。しかし共同体建設の途上は、しばしばこのような排他的な逸話に充ちてきた。で、私は、革命とか共同性とかについて思うときには、先ずこの解放となり合はせたり無惨さを見据えてからのことだ、と思つたのである。

また、仮りにゲルツェンが、イデオログとしての思索態度を崩さないで、この狭い生産共同体の只中におりたつたとしたら、そのことですでに、「共同的」なる關係に変化がおきてくるのではないか。

人々は突然あらわれたこの思索者を己れの味方だと確定するまでには、彼ら自身が次元のちがつた思索に入らねばならず、ゲルツェンもまた、一人のナロードとして彼等と親しもうとしながら日常茶飯事の多忙を必死で掻きわけて書物のための時間を捜すに決まっている。共同体の平和の概念は一義的にはあらわさなくなり、平和は崩れ、個人は自足しなくなる。その共同体は例えばミールをレールモントフが封じたように、より高次の「共同幻想」によりかからざるを得ない。こうして人々は次第に生活から思想をひきはがしてゆくのである。ゲルツェンは、西欧デモクラシーからの回帰を行なつた。我が故郷を回帰の原点として雪原上にピタリと据えつけ典型化したのである。そのとき、故郷ロシアは過去現在未来の時空を貫通する永遠の土地としてかつて経験したことのない抽象性を付与されたと見える。魂はその発祥の土地に還つて思想の輪を閉じているように思う。もうすでに、後代のロシア人は、このように自閉されたロシアを継承できないような気がする。(さて、このような主情的な読みこそが私の楽しみなのだ。いま私にいいたいことが二つでできた。一つは私にもこのような故郷の思想と風景が欲しいということ。一つは、日常生活をこんなに固定化してしまう限りその中の人間はもはや思考ができなくなるだろうということ。故郷という一枚の絵画の中へ入つてゆくようだと私が思うとき、私も自我という一冊の書物であるといわねばならない。双方が不完全であることが私を慰める。私が肉体をひきずつた自我であること、つまり不完全な書物であることが辛うじて、故郷と私をつないでいるのだ、時として親しい人の生身を放りだしてゆく生き様が苦しく、私もまた同じように生きていることに気づくと私は書物になりたくなる。け

れど、決して書物のような顔をして彼等の前に立つてはいけない。けれど、親しい人ほど私のひとり旅を許さない。私の内部のコンミューンもそれに呼応する。こんな苦しい自己矛盾があるだろうか。ゲルツェンは書物になった。彼はついにロシアへは帰らなかった。

人間はどうしても肉体の容量に余る想念を抱えてしまうのだ。せめて遮るものがない曠野へ出たい。肉体も糞尿も凍てつく寒さ地獄がユーラシア大陸の北限にあるという。観念の揺がりもその土地で凍るだろうか。私には北極ヒステリーに憑かれるという若い女シャーマンの必然がよくわかる。

石原吉郎はやはり私を心しずかにさせる。「シベリヤはだれの領土でもない」(石原吉郎『やばんすきいばおぐ』)「忘れるなシベリヤのけものには、毛深い腋が四隅あることを」(同『シベリヤのけもの』)故郷から引き離され、革命の内側で迫害された人、石原吉郎の詩は、しばしば理解を絶するものがある。しかし、時々、私は自分が日常的に考えているテーマを拡大鏡で見せつけられるような気になる。いったい私たちは、他人の国へいつてその土地を誰の領土でもない、と断定できるだろうか。「シベリヤのけもの」は毛深い四本の肢をもった巨大な机を連想させる。風景の中に立つた人はすべての物象に観念のいろあいを重ね、また観念の内部に深く生臭い大地をとりこむのだろうか。誰の領土でもないシベリヤは、実は己れ独りのものである。ラーゲリの囚人は政治的な規範を突きぬけて直接大地と交感することで辛うじて精神の最後の自由を護つたのであろうか。けれど故国の方がむしろ小さく戦後の貧しい日常の荒れ

たエゴイズムはこの帰郷者に辛かったのだろうか。何よりも故郷で孤独を貫くには相応の覚悟が要るのだ。

ロシア革命については、プロフェッショナルの研究が進んでいることだろう。けれど私のロシアは、ラーゲリとゲルツェンの共同体とロシア共産党が重像している場所である。ほんととはその奥に美しい本当のロシアがあるのかもしれないが、革命の内部風景に一つの広漠たる自然を継承しつつけながらなおロシア革命は革命の理想とはずれてゆきつつある。人間すべてを悪しき政治の魔園に引きこみ、やがて巨大な全体性へと吸収し尽そうというような。

昔、自治会運動へのオルグなどして帰った夜、トロツキーの「我が生涯」を読むことがあった。その中の一節の場面だけを鮮かに記憶している。やはり冬の、どこかの村の宿で死人が出た。その静寂さに礼儀正しい一瞥を与えてトロツキーは雪の道へでる。彼の馬車は一さんに首都へむかうのである。首都は革命——実にこの後姿が明快なのであった。だから私のトロツキーはこの後姿でのみ生き生きとしている。しかし彼も故郷へは帰れなかった。もしロシアにとどまったからといって、この背烈な政治のイデオログが、反対者及び「無思想」の日常人に敵としては存在しなかっただろう、というような希望など私は持てない。

現代ロシアの日常生活者は自足しているのだろうか。また詩人はそこから逃げたいなどと思うことがあるのだろうか。シニャフスキー……私は彼が、こんなデリケートな感受性がロシアに住むなんてとても苦しいだろうと思う。

四囲の自然——森、山、空——は手に触れ 目に見える形をした永遠である。(略)あらかじめすでに永遠を告げているこの存在の充盈感——それがわれわれをして——他に出口もないというこゝともあつて——自然へと奔らせるのである。かつて修道院へと去つていったのと同じように。(五八)

どういうわけなのだろうか？ ふりかえつたとたん新雪の上に自分の足跡があつたりするとこわくなつてくるといふのは？

(五八)

〔シニャフスキー 内村剛介他訳 思わぬ 閃き 現代ロシア抵抗文集3 勁草書房〕

シニャフスキーによって、「ロシア」的な感受性の重要な部分が疑われかけている、と考えぬわけにはゆかない。彼はタブーに手を触れている。アフォリズムの羅列という文章のスタイルが読者の好きなように料理しろ、といったていのものだが、その奥の見えざる場所で、詩人の価値観と詩人の生活現実の基盤がともどもゆるやかな分裂をはじめている。想念の内部では共同体の一義的なイメージは存在し得なくなってくる。彼にとつても他のロシア人にとつても。そのようなロシアをなお単一の共同体のごとく扱いうるならば、そのマヌーバー的役割を果たすのは、スターリニズムか、それとも「自然」であろうか。レールモントフが「祖国」という文字を置いた場所に、シニャフスキーは「永遠」という文字を置いた。その永遠に対してさえおぼろげではあるが、皮肉な視線が向けられている。それは回帰なのか脱出なのか。ゲルツェンの時代にはかかる未来は予想だにされなかったに違いない。私は、ゲルツェンから

遠くなった自分を感じるが、遠くなったのは革命と理想主義である。シニャフスキーもゲルツェンから遠い。何の復讐を恐れてか、シニャフスキーが雪中の足跡に恐怖している。その足跡はゲルツェンがのこし、トロツキーがのこし、ラーゲリの囚人であった日本の詩人がのこしたものである。もしかしたら、シニャフスキーは疑ってはならぬ根源的なものを疑っているのではないだろうか。疑えはいい、ロシア的なものをすべて、ロシアは誰の領土でもない。

さて、雪とは面白いものだ。人間の行為のみちすじをくきやかに大地へ捺す。季節があらたまればすべてが消えてしまうのに。

束の間の旅は終りに近づく。道草をさんざんたのしみながら。そう、書物はスーツ・ケースのようだ。私という文字を旅に誘いだす。読みながら私は脳裡のます目を私の文字で埋めている。私の存在が至高の文字であること、そんな書物をつくってみたくなった。その書物は「遙かなるゲルツェン」と表題されるかもしれない。私にそれを書かせる動機についていえば、それは四囲の環境のなかにあるというより、むしろ環境をはなれてひとり旅をしたがる観念のかたちのなかにあるといわねばならない。きわめて危険な旅、スリル、サスペンス、非合法の気配。窓外の田園風景は変わりばえしない。

もうすぐ駅だ。白く暮れる空。詩の最後の行を読みおえケースの中にそれを横たえる。実家につくと、私は「ただいま」というだろう。尻尾の千切れた犬がとびつき、父と母が暗い玄関に立つ。おかえり、疲れたでしょう。夕飯は？ 貴女ひとり帰ってきたの？ 今度は？ そう、私は疲れた。ほうほうのていで (一八ページへ)

一事が万事ではないにしても、このミスは決して特例ではない。ばくは、三島の後継者諸氏が、その新しく、かつ大胆な発想と問題提起を厳密な実証と公正な判断によって発展させることを期待する。そうすれば、ついにその天皇護持論は破綻せざるをえないだろうからである。真理は一つのはずなのだ。

四

以上みてきたように、最近の天皇護持論の大勢は、敗戦以来、政治の領域——体制としての天皇制——を去り、文化の領域——構造としての天皇制——にホーム・グラウンドを見出そうとしている。

この趨勢を、天皇(制)が政治の領域を放逐され、文化の領域に追い詰められる過程としてとらえることもできる。いまや天皇(制)は重要な政治課題ではなくなった、とする見解の根拠はこのような状況の把握にもとづく。しかし、まったく逆に、もはや政治の世紀は終わりを告げ、文化を主戦場とする時代の幕は切つて落とされた——一九六〇年代末以降にみられた世界各地の文化革命の勃発は、その調の声である、というところもある。もしこの見方が妥当であるとするなら、これらの天皇護持論の動向は見事に時代を先取りしている、といわねばならない。

天皇(制)が時代の動向におそろしく敏感であり、かつ順応性に富んでいることは、戦後の皇太子の結婚一つとってみても明らかである。それは力の支配する場で、それ自体まったく無力なものが永続的に存在しつづけるために発達した独特の第六感なのかもしれない。

いずれの状況判断が妥当であるかの論議は、この論文の範囲には

属さない。ただ、ぼく自身は、全体革命の立場からして後者の見解に立っている、とだけ言っておこう。^(註) ぼくが、三島を先頭とする天皇護持論を重視するのはそのためでもある。

(註) このことに関するぼくの見解については、『ロマン的反逆と理性的反逆』(一九七二年)のうち、とくに「V 永統(連続革命の破綻)」
「VI 全体革命の眺望」を参照してほしい。

付記 この論文は「天皇制の物質的基礎」と併せて大沢正道編『われらの内なる天皇制』(太平出版社 七月刊行予定)に収録される。読者と出版社の寛恕を得たい。

(五一ページより)

帰ってきたのよ。でも、また私は、彼のいるところに帰らなきゃならない。また書物を持て。烈しい悔恨が私の旅の二層の隙間を吹き抜ける。なぜ私はこんなふうな感情の旅をつづけるのだ。生きていく理由が見えなくなる。いや最初から生きている理由などはないのだから。だって、もう私は生まれてしまっているのだから。生涯の終りまで行かざるを得ない。それにしても、遙かなる近代の端緒に発されたゲルツェンの挨拶は如何なる返礼を受けたのであろうか。護るべきものは帰還の挨拶だ。でも私はそれさえも満足に言えない。私は完璧に自閉することができず、あまつさえいまだ近代のはてを予測できないからだ。

(一九七三年二月 この頃了)